

# ～地域の海を守る藻場の再生～

## 新勝浦市漁協浜行川藻場保全グループ

### 地域概要

浜行川（はまなめがわ）地区は、千葉県南東部の太平洋に面した温暖な地域である。漁業は、立縄漁業、一本釣り漁業、刺網漁業、あま漁業、見突漁業、採藻漁業などが行われている。漁獲される水産物は、キンメダイ、カツオ、ヒラメ、アワビ、サザエ、イセエビ、ヒジキ、テングサなどがある。



県内の内房地域沿岸では磯焼けが拡大し、平成 29 年度には岩礁面積に対する藻場の割合が半分未満まで落ち込んだ。一方、外房地域の当地区沿岸では、平成 30 年頃まで大型海藻が繁茂していたが、令和 4 年頃から磯焼けの兆候が確認され始めた。

磯焼けの進行に伴い、イセエビ刺網ではブダイなどの植食性魚類（海藻を食べる魚）の混獲が増加した。また、ブダイの胃内容物からは、アラメやカジメが確認され、植食性魚類による食害が磯焼け進行の要因の一つと考えられ、その対策が求められた。



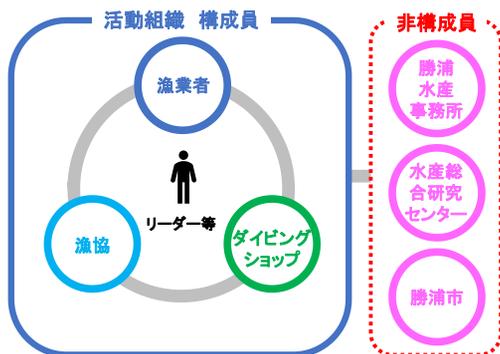
### 連携の経緯

当地区では、令和 2 年度から「資源・漁場保全緊急支援事業（国）」、「磯焼け緊急対策事業（県）」などを活用し藻場保全を図ってきた。また、令和 5 年度に漁業者・漁協中心の「新勝浦市漁協浜行川藻場保全グループ」を設立し、水産多面的事業（略称；以後、本事業と称す）を活用し、植食性魚類の除去等の取組を展開することにした。

当グループの設立にあたっては、漁業者・漁協だけでは、藻場保全に係るモニタリングを含む技術や知識が不足していることから、適正かつ順応的な活動が展開できる体制づくりが課題となった。

### 連携体制づくり

上記課題の中、当グループの体制づくりとして、藻場の知識やその保全に係る技術や知見を有す、千葉県勝浦水産事務所や水産総合研究センター、勝浦市と連携し、サポートを受けることにした。また、水中作業の技術や一年を通じた当地区の藻場等に係る海中情報を有するダイビングショップに構成員になってもらい、連携することにした。なお、連携したダイビングショップは、当地区の漁協が運営しており、ショップのメンバーは以前から漁業者との交流も深く、スムーズに連携できた。



主体	役割
漁業者	保全活動の主体、保全活動における作業全般
漁協	事業の運営、各関係者との調整等
ダイビング会社	潜水作業、保全活動における作業全般、情報提供
サポートメンバー	役割
勝浦水産事務所	保全活動に係る事務的支援、モニタリング調査の実施
水産総合研究センター	保全活動に係る技術支援等
勝浦市	保全活動に係る事務的支援等

### 連携による取組内容

当地区では、藻場保全の活動として植食性魚類の除去を行っている。また、藻場の衰退とともにアオリイカの産卵場が減少していることから、地域特認活動として、今年度から産卵床の設置も始めた。

除去活動は、ブダイを対象に、刺網を用いて行っている。船上作業は漁業者が実施するが、陸揚げ後の作業には、ダイビングショップのメンバーも手伝ってくれている。ブダイの除去数は、本種の資源増加の可能性もあるが、刺網を仕掛ける位置などの工夫によって採捕効率が向上しており、年々増加している。



アオリイカ産卵床の設置は、近隣から間伐した木材をロープで束ねて、錘を付けて海底に沈設する。また、設置後の産卵床のモニタリングは、ダイビングショップのメンバーに潜水してもらい効果を確認してもらっている。



藻場のモニタリング調査は年 2 回行い、毎回、勝浦水産事務所がサポートしてくれている。

### 連携の効果と今後の方針

当グループの設立にあたって、県や市と連携したことで、モニタリング調査や本事業の運営が適正に行えたり、また他地域の藻場の状況やその保全の事例に関する有益な情報などが得られ、それらを参考に地域の実情に応じた対策が図れた。また、ダイビングショップとの連携により、潜水調査など効率的に実施でき、活動の幅が広がった。加えて、メンバーの一年を通じた海中の情報は、藻場を含む海域環境の変化を把握する上で貴重なものとなっている。

今年 5 月に、勝浦市と当地区を含む市域の漁協、企業が連携し「勝浦市藻場保全対策協議会」を設立した。当協議会では、藻場の造成や J ブルークレジット認証に向けた取組、また植食性魚類を活用したハンバーガーのイベントでの提供など行っている。そこで、当グループも協議会のメンバーの一員となり、連携体制を構築することにした。

現在、勝浦市域の漁業地区においては高齢化が進行し、藻場の保全活動が行えない地域もある。保全を図る上では広域な取組が必要であり、地区を越えた連携が求められる。今後、近隣地域との情報共有や意見交換を図りながら連携を進め、活動を継続していく必要があると考える。